

## 二月堂仙人

和田繁二郎

宮嶋教授は「二月堂仙人」と号した。この号の由来は知らない。存命中に聞いておくとよかつたと思う。東大寺の二月堂と関係があるのかもしれないがよくわからない。

何にしてもこの仙人というのは、宮嶋氏のイメージによく合致したことである。氏はたしかに仙人であつた。氏はおよそ世間通常のつきあいをしなかつた。コーヒーのみ、あるいは酒をのむ友人を持たず、したがつて、郊外を散策したり、夜の街を無意味に歩き廻るようなことはなかつたようである。また何かの趣味や余技のグループに属して、無償の愉悦にふけることもなかつたようだ。氏は全く学問の人であつたといつてよい。

氏の学問の真髄は、門外漢の私には詳しくはわからないが、氏独自の意見に富んでいたことは察知されるのである。世俗のつきあいをしなかつた氏は、おなじく他の学者の説ともつきあわなかつたと言つてよからう。

ともあれ、氏の独創的な見解には深念がこもつていられるように見えた。そこに、氏の学者としての優れた点も、またあるとすると、その欠点もあつたのではないかと思う。氏は死の半年ほど前から小康を得て、学位論文に着手し、またいままででない学問の喜びを体験していたといふことである。にもかかわらずにわかには他界された。氏の残念さはさこそと思われる。

氏の仙人ぶりには幾多のエピソードが伝えられている。十数年間にわたつて職を共にしてきた私も、ほほえましいいくつかの場面を語るることができる。しかし、いまは語るべきではなからう。ここでは氏の仙人的生活の中に、ひそかに愛されていた、喜びの対象について想起することにしよう。

氏の幸福の絶頂は、和子夫人との生活の一期期であつた。これは和子夫人逝去の後、私に洩されたところであつた。氏のことだから、この微細は語られなかつたけれども、その口吻つに一つの陶酔がほの見えていた。そしてまた感謝の思いもこめられていた。

氏には趣味はないと言つたが、必ずしもなかつたわけではない。占筮とか手相とかもそ

の一つに見えるかもしれない。しかし、これは趣味ではなく、信仰の一つだと言ふべきだろう。

氏の好きなものに自動車があつた。桂に新居を構えてまもなく、氏は自動車を買いたいという抱負を洩した。また氏を静養中に見舞つた時、コタツの上に猟銃のカタログが置いてあつた。またお宅の玄関に、陶製の大きな象がおいてある。これは、近所の植木屋の表にあつたものを懇望して買つたということだつた。

これはほんの一例にすぎないだろう。氏はやはり世俗のものを愛していたように見える。しかし、その世俗のものは、二三の人間をのぞいて人間でないものに限られていたのではないか。氏は、依然として、世俗の煩雜と俗悪に面をそむけてきたといつてよい。その拒否の姿勢はきびしいものであつた。それだけその姿勢は悲しみと苦しみとに支えられていたようにも思う。それをも耐え得たところに氏の強靱さがあつたと言わねばなるまい。一面、氏の仙人性には、この社会も、また私達も何らかの責めを負わねばならぬのではないかとも思えるのである。

三八・一一・一

(本学教授)